

ホンモロコ天然卵由来親魚の養成と採卵

田中 秀具・三枝 仁

1. 研究目的

近年、近年琵琶湖で激減したホンモロコ資源を回復させるため、滋賀県は、平成18年度(以下、平成をHと表記)以来大量生産放流事業を実施している。その概要は、滋賀県水産試験場(以下、当場)が、琵琶湖内に産卵された天然卵を採集し、親魚に養成する。その親から採卵した発眼卵を滋賀県水産振興協会(以下、協会)へ供し、協会は飼育2代目の親魚を生産・採卵し、その発眼卵を琵琶湖へ放流するというものである。ここではH21年度事業の内、当場が担った天然由来親魚からの採卵と、今年度産親魚候補魚の生産について報告する。

2. 事業の計画

H21年度(4月～翌年3月)の事業の計画は、次のとおりであった。

過年度から飼育されている(H18～20年に琵琶湖で採集された卵由来の魚)1～3歳親魚から100万粒採卵し、協会へ提供する。

H21年産天然卵由来親魚候補魚(0歳魚)を5000尾生産する。

3. 事業実施の結果

についてはH18産親魚(3+)6000尾を収容した1群から4月25日～6月2日の間に、79.2万粒、H19産(2+)が主体の7500尾と9500尾の2群(H18産が混養)から、4月3日～5月29日の間に、各々121.5万粒97万粒の発眼卵を得た。各群は、各々40m²の屋外池で湖水にて飼育した。

本年度の発眼卵生産量は297.7万粒であった。なお、もう1群飼育していたH20年産の養成魚(1+)12000尾からは、事業規模での採卵ができなかった。0歳時の成長が不良であ

ったこと、この群のみ水温変化のない地下水での飼育のため成熟不良である等が考えられたが、明確な理由は不明である。

生産した発眼卵のうち、172万粒は協会の親魚養成用に協会へ移送した。余剰生産分125.7万粒は直接琵琶湖へ放流することとしたが、このうち、109万粒は、放流先の探索のために、かつてホンモロコの産卵繁殖場であったといわれる大津市唐崎地先¹⁾(40万粒)と、高島市四津川地先²⁾(69万粒)へ放流し、残りは新しい産卵場にすべく当場地先(16.7万粒)へ放流した。

については、5月にホンモロコの産卵調査(別に報告)において湖内3ヶ所から採集された卵を当場にて孵化させ、30Lポリカーボネートタンクで飼育し、孵化後1ヶ月の間に、コイ、フナ等の雑魚を除去し、その後、7～11月の間は1ト槽2面に収容して飼育し、11月25日に取り上げたところ、20.6kg、6016尾が生産された。親魚養成用屋外池(40m²)へ放養し、3月まで飼育した。3月末の生残尾数は約6000尾であった。

4. 成果

本年度の計画は、達成できた。

なお、研究ではないため、飼育魚の体調を優先させ、データを得る為の取り上げは行っていない。また、琵琶湖では、当歳魚と1歳魚が大部分を占めるホンモロコだが、飼育下では3+でも産卵可能であることが確認できた。ただし、4歳までは、殆ど生残できなかった。

5. 謝辞

)発眼卵の放流に御協力いただいた大津漁業協同組合、および三和漁業協同組合に感謝致します。